

Title	逆輸入の経営戦略
Sub Title	
Author	脇坂光則(Wakisaka, Mitsunori) 小林規威
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1988
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1988年度経営学 第657号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001988-0657

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0657

学生氏名

脇坂光則

主査 小林規威

副査 小野桂之介

所属ゼミナール 小林規威研

青井倫一

逆輸入の経営戦略

本論文は、日本にとって新たな経済、経営現象である。日本企業による海外生産拠点からの製品・部品輸入（以後、逆輸入）を研究対象としたものである。

日本企業の経営戦略は、過去一貫として輸出を中心に据えたものであったといえるであろう。長年の企業発展により、生産、販売戦略等は洗練されてきたといえようが、基本的には輸出を念頭に置いた経営政策に変化はなかったといえる。

この間企業は、高コスト化した国内生産に代わる低コスト生産拠点の必要性や激化する一方の貿易摩擦緩和のために海外直接投資を増加させてきた。折しも昭和60年後半から始まった円高・ドル安による交易条件の変化は、海外直接投資の増加とも相まって、企業に新たな経営戦略の可能性を告げようとしていた。すなわち、冒頭に述べた海外生産拠点から日本国内市場への逆輸入である。

新たな展開である逆輸入には理論、定説は存在しない。従って、既存の貿易理論、海外投資理論、経営国際化理論、その他の経営学の理論を参照し、それらを基にして私の理論的枠組みを構築した。この理論的枠組みに対して、企業から得た情報を摺合わせて相違を検討したものが、私の本論文に於ける研究の骨格を成している。

大まかに理論的枠組みの構成を説明すれば、①逆輸入が行われる条件の検討 ②逆輸入が行われた場合の企業への影響 ③逆輸入が企業経営に意味すること ④逆輸入企業の経営国際化発展段階の評価、となっている。

理論的枠組みと企業情報の摺合わせの結果、若干の差異はあったものの、ほぼ理論的枠組みから企業情報を説明できた。また、最終章には一節を設けて、研究から確認できた項目を企業への提言としてまとめている。